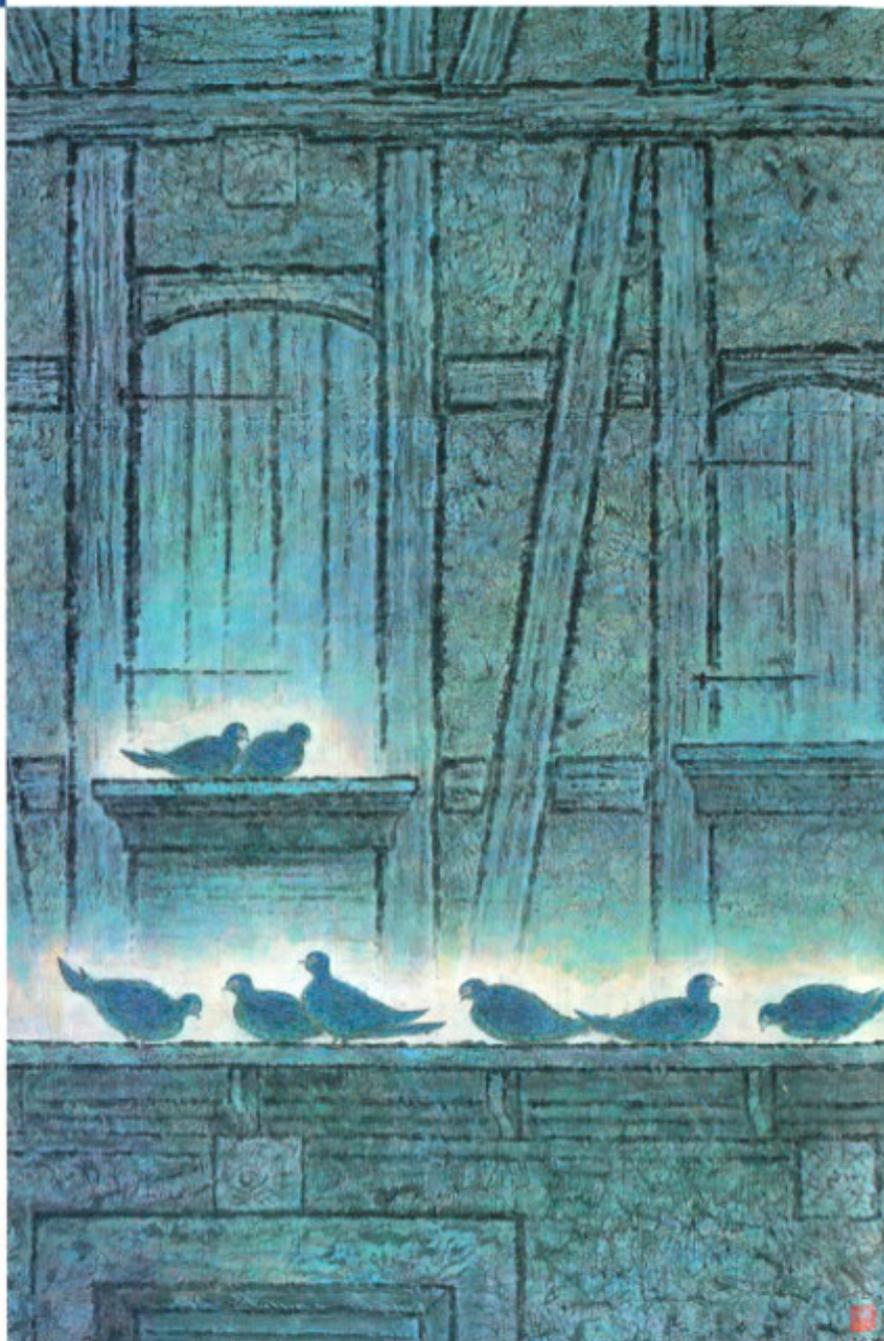


沖

8  
2015

俳句雑誌[お色]



敬

仰

能村 研三

## サンディエゴ訪問

山藤は粗にてへつらふこと知らず

紫蘇もんで口約束を信じをり

梅雨兆す手梳き鎮めの寝癖髪

敬仰の波郷大足南風吹く

六月十八日から同人のガルシア繁子さんを訪ねてアメリカ西海岸の町サンディエゴへ行った。今まで海外を旅するのは殆どがヨーロッパであったので、アメリカに行くのは初めてであった。今回私に同行してくれたのが、石川肇児さん、瑠誠一郎さん、小林和世さんの三人。ロサンゼルスからアムトラックという鉄道で途中オーシャンビューを築しみなが二時間余りでサンディエゴに到着した。

ホテルでガルシア繁子夫妻が出迎えてくれた。これまでは毎月の投句といたただくお便りだけでお会いすることが出来たのは初めてであった。サンディエゴは海軍や海兵隊の基地で、太平洋艦隊の重要な拠点でもあり、サンディエゴ湾内にはミッドウェー航空母艦が停泊し現在は博物館として公開されている。

ご夫妻の案内で、夕方のサンディエゴ湾のクルージングに招待を受けた。湾内には多くの軍艦が停泊しており、コンドミニウムなどの高層ビルが立ち並ぶダウンタウンの眺めも素晴らしかった。

歳時記に手擦れの艶や竹の花

溝 浚へ市民運動家の人と

櫟のめぐりめぐりの夏葉かな

松の芯突つ立て祥月詣りかな

榊の木に宿り寝をする梅雨茸

蜘蛛の囀に雨滴つつみの撓みかな

※一部「俳句」七月号発表句

翌日の午前中はラゲナビーチにお  
住いでかつて市川学園で登四郎、翔  
の授業を受けたことのある高橋正弘  
夫妻の車でオールドタウンなど市内  
観光を案内していただいた。午後か  
らはガルシアさんのお宅を訪ね、歓  
迎の茶会と句会が開かれた。お庭に  
は紅白の幕と野点傘が張られていた。  
又お部屋は、八畳の畳敷きで床の間  
には先師登四郎の遺影と句が揮毫さ  
れたものが飾られ、登四郎の命日に  
ちなみ端午の節句の兜も飾られてい  
た。一万キロも離れた異国の地にあ  
つても、先師を慕ってこのような配  
慮が嬉しかった。茶会の後の句会で  
は、遠くポートランドから参加して  
くれた黒田泰子さんと地元の下恵  
美子さんにもご参加いただいた。当  
日茶会でお点前を披露して下さった。  
アメリカ在住の日本人の若い女性た  
ちにも俳句を出句してもらった。

初めてのアメリカ旅行であった  
が、こんな遠く離れた所でも深く温  
かい俳縁があることが嬉しかった。

# 蒼茫集



五月の尾

千田 百里

島 豆腐

大川 ゆかり

みちのくへ発つや五月の尾を掴み  
みちのくに先師のことば汲みて首夏  
楝の花やゆづられし師に蹤きて  
登四郎・翔の言霊館や緑さす  
目つむれば風候見ひらけば万緑  
夏帽子曲家並びして撮らる

蝌蚪の国水輪生むこと生業に  
前髪のぱつつん切りや夏立つ日  
祭来る角しつかりと島豆腐  
百合匂ふ言葉交さぬひとときに  
薫風や回されてゐるピザの生地  
青葉木菟鳴いて湿らす夜の闇

十 葉

松井志津子

少年の眠り

甲州千草

十葉と詠みどくだみと引き抜けり  
潮騒が夢を浸して明易し  
沖待ちの船の灯れる籐寝椅子  
烏賊船の出る百の灯を試しつつ  
梅雨寒し片戸仕舞ひの土産店  
羅にうりざね顔を載せて来る

休みなき電気メーター親燕  
髪を切るカサブランカの近い席  
胸板の厚きが抱へ来る蕨  
鬼剣舞の発条しなやかに緑濃し  
発心の色の黄菖蒲詩館  
少年の眠りて伸びるみどりの夜

誤算 安居正浩

白玉や人は誤算を繰り返し  
鏡台に日暮の匂ふ朴花忌  
甚平着て二円切手を買ひ過ぎし  
竹皮を脱ぐ冗談のやうに脱ぐ  
網戸して夜の気配を聞いてゐる  
炎天を待たず逝きけり好敵手

汗光る 辻美奈子

北上の風が風呼ぶ山法師  
青嵐や塚を隔てて伊達南部  
汗光る若き誇りの鬼剣舞  
鬼剣舞角なき面涼しかり  
小満の雨のひとつぶづつ新た  
尊採るすこし昔を手繰り寄せ

晴をとこ 千田敬

りんご青し先師受賞の地に佇てば  
邂逅の憶ひはセピア青葉木菟

頬杖は詩を待つかたち遠卯波  
舞ひ終へて鬼面は汗の美少年  
万緑や師は二代目の晴をとこ  
芒種ゆゑにかみちのくの記憶冴ゆ

列島北上 藤原照子

守り来し藤棚三坪余生ふと  
IT音痴薫風に溺れけり  
列島の青田植田と北上す  
みちのくの山河に抱かれ明易し  
アカシアの花沿ひ銀河鉄道線  
アカシアの降るふる洪民駅に佇つ

肅肅と 細川洋子

父の日の電信柱肅肅と  
わたくしのからだ空洞螢の夜  
とうすみの有るか無きかの翹合はす  
足し算のとどのとどつまり蘭鑄  
軽焼の生成り色なる涼しさよ  
父の日の太鼓はらわた震はせる

北上川 杉本光祥

立志とは九弁にひらく朴の花  
北上川万緑光りして明くる  
北上川いま万緑の賛尽くす  
北上の川面光りを夏つばめ  
踏み込めば南部曲家土間涼し  
鬼剣舞若人の夏まつ盛り

若き鬼 森岡正作

青嵐 剣舞の若曾鬼放つ  
啄木を偲べば海鞘のほろ苦し  
職業は無職と書いて水盗む  
派手なシャツ派手に干されで青蜥蜴  
叔父叔母が来てゐるらしき青簾  
乳牛の孕みてゐたり合飲の花

鮮度のあかし 林昭太郎

青梅を雨待つ色と思ひけり  
滴りの落つる力を貯めて落つ

ブルームス針の奏づる緑の夜  
万緑の真ん中にゐて不整脈  
祭来る鍵一本の暮しにも  
早口は鮮度のあかし鯉耀る

渋団扇 小松誠一

杭を打つ音の地を這ふ街薄暑  
山並を映す植田は方眼紙  
人生に犠打もありけり渋団扇  
炎天へ気丈な影を連れて出る  
炎天へ無防備のまま挑みけり  
くれなゐは安らぎの色大賀蓮

金だらひ 宮内とし子

一匹の金魚のための金だらひ  
谷中画く青い眼に会ふ風五月  
父の日のセピアに変わる父の顔  
葉桜に騎る山門一茶の碑  
雲切れて次の雲くる桜桃忌  
胡瓜垂らし河童に会はむ河童測

石工の背 柴田近江

緑さす発破支度の石工の背  
鵜舟洗ふ夕日火照りの波掬ひ  
涼しき灯吊る曲り家の手斧梁  
曲り家の嬬座にかよふ風涼し  
三十五銭の俳誌「夏草」黴匂ふ  
朱夏煽る鬼劍舞の鉦・太鼓

土の匂ひ 高橋あさの

麦熟るるしきりに渴を覚えけり  
水打つて土の匂ひを浴ぶ日暮  
蛩ぶくろ人の名忘れやすきかな  
路地ひとつ間違へてをり花石榴  
草むらにいのちをたたむ梅雨の蝶  
紫陽花や浅間に厚き雲据り

鴨の水尾 鈴木良戈

牡丹の崩るる音のなかりけり  
黄心樹の開きし花卉陽を溜めて

初夏の光り集めて鴨の水尾  
川風の五月の香りと船来る  
遠くより勢ひづいて卯波かな  
真つ新な夏来たるなり磨崖仏

こんないい日 大畑善昭

水黽やこんないい日はさうはなく  
えごの花父祖らの葛屋聚められ  
満月のみどり肺腑もみどりなし  
浦島草過ぎたる時は過ぎしまま  
劍舞の白鬼が跳んで天揺るる  
北上は母なる流れ六月へ

ブロンズ像 上谷昌憲

蠅蝶に弓引き絞るブロンズ像  
麦秋や有線放送訃を告ぐる  
灯台へ茅花流しの遊歩道  
袋掛夫婦無言ですれ違ふ  
海鮮丼に山葵効きたる祭笛  
面映ゆく茅の輪潜れば雨上る

創刊号 河口仁志

黄沙ふる護憲改憲問はれけり  
濡れ縁に涼みぬし師のむかしかな  
鳩亭を訪ふ炎昼の迷路かな  
竹皮を脱ぐ朝からの戦ぎかな  
曝書（沖）誌第一号昭和四十五年十月する中に懐かし創刊号  
登四郎忌過ぎて玉解く芭蕉かな

明けそめし 溯上千津

明けそめし夏の露原石小法師  
挽ぎたての完熟トマト忌の朝餉  
巢立鳥骸をひとつ巢に残し  
ドライアイに泪滲みきぬ海夕焼  
吉兆かあどけなきぞの白蜥蜴  
鍼ゆるす医師の同意書南風吹く

十 指 湯橋喜美

生食の玉葱に朝動き初む  
十指もて足し算引き算梅雨籠り

星七つつなぐ指先風涼し  
忌の父の来給ふ梅の落ちつぐ夜  
蚊帳吊つて母の嘶を口伝へ  
白雨去り呼ばれて吾に鼻濁音

正丸峠 酒本八重

正丸峠駅の高さに合歓咲けり  
揚雲雀いのちは天が預かれり  
郭公を聞く幸先の佳き娶り  
振つて切る笹の水滴若葉光  
白靴や職場に馴れし足取りで  
待つ人に日傘を高く掲げたり

風の忘れもの 羽根嘉津

考へる我を一瞥羽抜鶏  
茅花流し玉の夕日の乗り易し  
蚩袋濃きむらさきは憂ひとも  
舌切れし風鈴風の忘れもの  
三歳のいつも駈け足新樹光  
人質の今も世にあり霾ぐもり

# 潮鳴集



大河の朝 町山公孝

行々子大河の朝を告げにけり  
万緑や百歳若くなる心地  
来し方に悔いの数多や実梅もぐ  
穂の芽や胸につきんと子の言葉  
いつまでも初心泰山木の花

詩 歌 峰崎成規

東北大会二句  
齟落し急く「はやぶさ」の青葉窓  
詩歌とは揺らぎつ編みつ蜘蛛の糸  
草刈つて遠山ぐいと引き寄せる  
時の日の時の往復砂時計  
奔流の眼前失せて滝となる

余 白 七田文子

選るならば燃ゆる真紅の薔薇一本  
あるがままに青葉溢るる雑草園  
余白てふ言葉をふつと山法師  
立葵いづれが西施・楊貴妃か  
麦の秋駅は町への出入口

脱 皮 七種年男

血液のさらりと流れ若葉風  
はんざぎの岩であること断念す  
蜘蛛の子の散りて地軸の揺らぎけり  
熱帯夜われより脱皮したき我  
生きざまにハードとソフトかたつむり

# 沖作品



# 能村研三選

残花明りして山門の一茶句碑

市川

溝呂木信子

ひらがなの形に咲いてかたくりは  
筍の獸立ちしてをりにけり  
夕涼や桐の正目の男下駄  
修正液の白き無言や夕薄暑  
軽すぎても心もとなき更衣  
紫陽花にピカソにもある青の時  
何も無きことの幸せレース編む  
七彩の鬼の乱舞やみどりの夜  
「どんとはれ」で終る民話や麦の秋  
屋根よりも高きブロンズ桐の花  
筍の自衛の糸ぐみ貫けり  
ブロンズの乙女の鎖骨薄暑光  
若葉風河童を待ちてもう午後  
曲屋の高き天井青あらし

千葉

岡 真紗子

市川

小林 陽子

日照雨去り若葉の匂ひ日の匂

本池美佐子

遠き日を眺めてをりぬ首夏の海  
気遣ひの葉書たまはり若葉雨  
蝙蝠の落日急かす乱舞かな  
沿道も氏子も濡れて夏祭  
アカシアの包む明治の芝居小屋  
胸騒ぎ隠せぬ白の七変化  
太古なる貝紫に染む麻衣  
張り合ふも認め合ふ仲さくらんば  
入道雲ブラウス駆ける終業日  
若楓葉ずれの音を風散らす  
子を叱る声筒抜けや青簾  
ビール干す血液型を争点に  
子の来る日筍飯を炊きにけり  
近道の路地抜けられぬ街薄暑

東京

山下ひろみ

千葉

塩野谷慎吾

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

軽すぎて心もとなき更衣 岡 真紗子

福永耕二に「へ衣更へて肘のさびしき二三日」という句があるが、夏の更衣は普通六月一日で、まだこの頃は気温も二十度に満たない時があり、まだ若い中高生などは開放感から来る嬉しさで元気に歩いているが、大人はそうはいかない。昨日までの冬の制服の厚みや重さが突然軽くなるのだから、それこそ「心もとなき」という頼りない気分が頷ける。

若葉風河童を待ちてもう午後には 小林 陽子

先日東北北上の勉強会での収穫作品。民話のふるさととして知られる遠野の河童渚では「カップ捕獲許可証」が発行されている。胡瓜などを餌に河童釣りが出来るもので、観光客にも河童の捕獲を楽しんでもらおうという企てだ。この許可証は毎年一万枚以上が発行されているが河童を捕獲できた人はまだいない。機知に富んだユーモアが面白い。

遠き日を眺めてをりぬ首夏の海 本池美佐子

首夏は初夏と同じ意味だが、詩歌に詠むのにはこちらの方が相応しいのかも知れない。夏の到来と共に海が一番美しい時季を迎える。作者は夏の海を見ていると遠い月日の彼方に様々な思い出が蘇ってきた。眺めているものを時間的系列の中に置いたところが句を面白くさせた。(以下略)

修正液の白き無言や夕薄暑 溝呂木信子

最近ではパソコンやワープロの普及で、自分の手で字を書く所謂「手書き文字」と言う行為が少なくなってしまったが、それでも折々に字を書く機会がある。そんなときに避けて通れないのが、書き間違い。鉛筆やシャープペンなどなら、消しゴムで消せばよいのだが、ボールペンや万年筆などの筆記具は消しゴムでは消せない。「修正液」が作られたと思う。こうした単なる文房具の一つが俳句の素材として詠まれるのもめずらしいことで面白い。修正液は地の白さに同化して、その間違いを隠しきつてしまう。どんな間違いがあったのか今となっては知るすべもない。これを作者は「白き無言」と詩的な表現を使った。